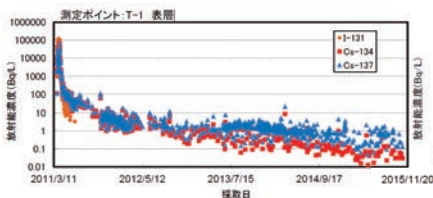
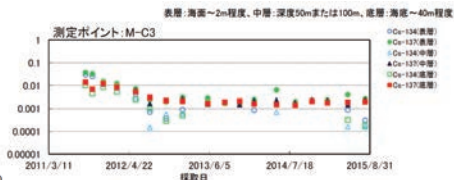


海洋のモニタリング 海水濃度の推移

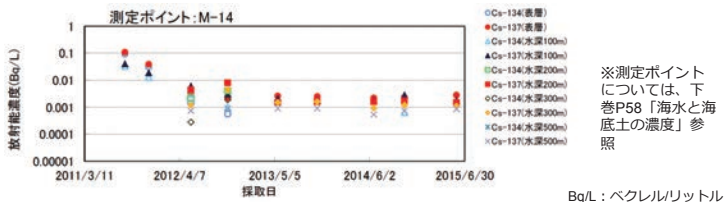
福島県沿岸の海水の放射能濃度の推移



福島県沖合の海水の放射能濃度の推移



外洋の海水の放射能濃度の推移



震災後から平成27年11月20日まで

原子力規制庁ウェブサイト放射線モニタリング情報から作成

セシウムが付着した土壌は川を經由して沿岸まで運ばれます。

陸地近くの沿岸の海水の放射能濃度は事故直後は、10万ベクレル/Lに上昇しましたが、1か月半後には、その1,000分の1である100ベクレル/Lに下がり、さらに、1年半後には、10ベクレル/Lに下がりました。

陸地から50km沖合の海水濃度の測定は、表層が海面から1m、中層が50～100m、下層が海底若しくは海底から10m上の海水で行われています。表層では親潮や黒潮、また、風の影響で海水の流れができます。中層は表層の流れで海水の流れができます。下層の海底及びその近辺ではよどんでいる状況です。セシウムは土壌に付着しており、その土壌は海底土若しくは、それが巻き上げられて、中層、表層に運ばれます。

事故から半年後には、沿岸からの放射性物質を含んだ土壌が陸地から30kmの沖合まで運ばれましたが、沖合の測定ポイントM-C3での濃度は0.05ベクレル/Lと沿岸濃度の200分の1まで薄まっています。2012（平成24）年には、放射能濃度の高い海底近くでも0.008ベクレル/Lまで下がっています。それに伴い、表層や中層も下がっています。

陸地から180km離れた外洋では、事故から半年後でも表層の濃度が30km沖合の濃度と同じ程度の0.1ベクレル/Lとなっています。事故から2年後には、0.001ベクレル/Lと更に2桁下がっています。

（関連ページ：上巻P159、「海洋中の分布」）

本資料への収録日：平成26年3月31日

改訂日：平成28年1月18日